

未来高松市2017

この度、政策コンテスト「未来高松市2017」を催しました。次代を担う若者が、本市の未来を思い描き、理想の高松を実現するための政策を企画立案し、プレゼンテーション形式で発表し、競うものです。テーマは、「10年後20年後の高松が若者から選ばれるまちであるために」です。中学生から39歳までの参加者を募集し、中学生5チームと、大学生1チーム、社会人4チームの計10チームから申し込みをいただきました。8月から約3か月間、参加者には高松市長になったつもりで、フィールドワークによる現状確認などを行いながら、自分たちが思い描く未来の高松のまちづくりに関する政策を練り上げ、予算まで含めた形で提言にまとめてもらいました。

大賞は、20年後の理想像を「こどものEGAO（えがお）が溢れる街、高松」として政策を提案した香川大学附属高松中学校の「笑（Smile）カンパニー」チームに決定。内容は、市民に家族の時間を取ってもらうための「笑（Smile）Weekの制定」や中・高生も含めた「起業支援制度の制定」、中学生主催の「笑（Smile）イベントの開催」というものです。他にも、路面電車やサッカースタジアム、市立大学、出産ツーリズムなど、夢や魅力がある政策が多くあり、今後、内容によって実現可能性などの検討を行うこととしています。

それにしても全体の半分を占めた中学生チームの発想の豊かさと課題検討の的確さ、プレゼンテーションの元気の良さと言得力には正直恐れ入りました。中学生がこんなに真剣に高松市の未来を考えていることに感動を覚えました。

20世紀初頭に活躍したドイツの著名な社会学者であるマックス・ヴェーバーは講演録「職業としての政治」の中で「政治とは、情熱と判断力の2つを駆使しながら、硬い板に力を込めてじわっじわっと穴をくり貫いていく作業である」と言っています。人口減少、少子超高齢社会という困難な環境の中であるからこそ、未来高松市に向けて、しっかりとした政治の営みが求められていると思います。このコンテストは政治や政策がこの国や地域をより良くして、次の若い世代に確実に引き継いでいくものでなければならない、という当たり前のことを再確認する良い機会ともなりました。